

令和6年度 研究紀要

研究主題

自ら考え、学びを深化させる指導方法の工夫

～子どもの疑問を大切にし、問い続ける力の育成をめざして～



金沢市立野田中学校

I 研究の概要

1. 研究主題

学校研究主題 自ら考え、学びを深化させる指導方法の工夫
～子どもの疑問を大切にし、問い続ける力の育成を目指して～

2. 主題設定の理由

本校の学校研究が目指すところは、主体的・対話的で深い学びの実現である。特に、生徒が自ら「問い」を見出し、その探究に取り組む姿勢を育むことを核心としている。そのためには生徒が興味・関心を持って学びに向かうこと、見通しを持って学習に取り組み、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、他者と協働し様々な考えに触れ考える力を高め、学びを深めること、また、自己の学習活動を振り返り、次の学習につなげることが求められる。

本校では令和2年度より、「対話」指導と「振り返り」指導に取組の重点をおき、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け研究を進めてきた。その結果、他者と協働して学ぶ良さを感じられていることが生徒アンケートから見えてきた。しかし、「わからないことを進んで訊くこと」に対し、積極的に行うことができている生徒が4割に満たず（令和5年後期）、学習課題に取り組む姿勢に課題が見られた。

これらの目標と課題に対応するため、現行の学習指導要領および金沢型学習スタイルに基づいた「野田中学校 学びのスタイル」を設定している。基本的な授業の流れを「学習の見通しを立てる」→「課題に対する自分の考えを持つ」→「他の生徒の意見に触れ、わからないところを訊き合うことで、自らの考えを深める〈対話〉」→「授業のおわりに、課題に対してまとめたり、自らの考えの変化や新たな疑問などを書いたりする〈今日の学び＝振り返り〉」としている。この一連の学習プロセスを通じて、生徒が主体的に学び、対話を通じて思考を深め、振り返りによって次の学習へとつなげていくことを目指している。

〈今日の学び＝振り返り〉で自分の学びを振り返り、考えの深まりを自覚したり新たな課題に気づいたりすることができるためには、わからないことを進んで訊いたり、調べたり、考えたりする積極的な姿勢が大切である。自分の中に「知りたい」「考えたい」という思いがあるから学びが深まるのである。そのためには、「学習の見通しを立てる」「課題に対する自分の考えを持つ」段階で、積極的な自我関与が必要であると考えた。「自分の問い」をもって授業に臨むのである。

また、変化が激しく予測不能な現代社会において、自分で問題意識をもち、解決に向けた方法を考え、実行する力は不可欠である。「自分で課題を見つけることができ、解決できる」生徒を、また問題解決の際には解決方法を考え、将来にわたって「自分の問い」をもち他者と協働しながら解決できる生徒の育成を目指して、本研究主題を設定した。

3. 研究仮説

生徒が「自分の問い」という意識をもつためには、「学習の見通しを立てる」「課題に対する自分の考えを持つ」段階で、積極的に関与させることが大切である。そのために、教師は生徒に自我関与を促すための仕掛けを行う必要がある。この仕掛けによって生徒の学習活動に対する積極的な態度を引き出したいと考えた。本校ではこの仕掛けを「不思議の

タネ」とし、教師は授業のねらいにつながる「問い」を生徒に抱かせるための「不思議のタネ」を設定し、提示する。「不思議のタネ」とは文やフレーズ、図や映像といったそれ自体は問いの形になっていないものである。本校では、この「不思議のタネ」からの授業づくりを行うことにより、以下２点の仮説を立てた。

仮説 1

生徒たちは提示された「不思議のタネ」に自ら「問い」を抱き、協働して「問い」を創る。この過程を通して、生徒はこれから行う学習活動に意欲や理解を高め、積極的に取り組むことができるのではないかな。

仮説 2

この「問い」創りの経験を積むことで、「自分で課題を見つけることができ、解決できる」生徒を、また問題解決の際には解決方法を考え、将来にわたって「自分の問い」をもち他者と協働しながら解決できる生徒を育てることができるのではないかな。

4. 研究方針

従来本校で行ってきた「対話」活動と「振り返り」指導の実践の成果を生かし、「不思議のタネ」の提示を通して生徒に課題への自我関与を促すことを全教員で共通して取り組む。そして、生徒の自ら疑問をもち、考える力を高め、学びを深め、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る。その際、生徒の実態や発達段階に配慮しながら取組を充実させる。また、教科部会の活性化をはかり、学年会とも連携して共通理解・共通実践を行う。

研究を進め、深めるために、年間４回外部講師を招聘して指導・助言を仰ぐ。また年間３回の授業研究協議会および年間１人１回以上研究授業を実践し、授業研究を進めていく。

5. 研究内容

(1) 重点的な取組

- ・生徒の問いを引き出す「不思議のタネ」の工夫

授業のねらいにつながる「不思議のタネ」として、どのようなものが適切であり、効果があるのかを実践を通し、精査・検証する。実践した「不思議のタネ」の情報交換等を行い、授業のねらいにせまる教科の本質を踏まえた「問い」を生徒から引き出す工夫をする。

- ・従来の対話指導と「今日の学び（振り返り）」指導の継続

対話指導については、従来から続けている共通の話型である「学ぶときの訊き方」を利用する。「学ぶときの訊き方」を教室掲示し、共通実践することで、学習活動の円滑化・効率化を図る。

振り返り指導については、授業の終末で学習内容や自らの変容、新たな疑問等を文章化する。どんな内容を「今日の学び（振り返り）」として書くのかを教室掲示し、全教員で共通実践を続ける。

(2) 学力向上・授業力向上の取組

〔学力向上〕

- ・学力の現状の把握と方策

学力調査等の結果を分析し、教科および学年で効果的な対応策を立てる。小中一貫教育の観点から、学力調査等の結果分析について情報交換し、小中相互の学習指導に活用する。

- ・学習習慣の確立

学年の発達段階に応じて家庭学習習慣の定着を図り、各学年の学習担当から提案され、学年で検討した取組について共通理解のもとに取り組む。

- ・個別の支援

学習に関する個別相談・個別指導の機会を設け、意欲・学力の向上を図る。定期テスト前の質問教室を全学年共通の日程で行う。

- ・野田中校区 学びのスタイル「わからないことを大切にする」

教室前面の黒板上に掲示し、小中連携を進めていく。

- ・学習コーナーの常設

職員室前に長机を設置し、先生へ質問するスペースとしても活用する。

- ・読書活動について

思考力の基となる読解力を育成するなどの効果を期待し、朝読書の時間を設定したり、読書コーナーを設置したりする。1年生は図書館オリエンテーションを受けてから、図書館を利用する。

- ・「野田中学校 学びのスタイル」ファイル（青ファイル）

各学期の学力向上の取組や年間指導計画、金沢型学習スタイル等を綴り、学校研究の共通理解を行う。

〔授業力向上〕

- ・教科部会の活性化

教科部会で授業の進め方や学習指導案、指導する際の課題等の検討を行う。これらのデータを蓄積し、実践の質の向上を図る。教科部会の時間は時間割に組み込み、確実に行われるようにする。

- ・共通実践の授業参観

不思議のタネを使った授業を行う際、職員室のモニターなどを使って実施を共有し、時間が空いている教員が参観を行った。その後は意見交換を行い、実践から授業力の向上を図る。

- ・校内サポート塾

「不思議のタネ」の作り方や授業の展開の仕方など、悩んでいることや困っていることを意見交流する場をつくる。参加は自由にし、月に1回20分から30分程度放課後に話すことで、実践する上での不安を解消することを目指す。

（３）若手教員の育成

①校内で組織体制を整備し、計画に基づいて若手教員の研修を実施する。

②日常的なOJTを教科、学年、校務分掌部会を中心に実施する。

③本校の教職員が講師を務める「ひまわり塾」を月一回程度実施し、授業力の向上、学級経営力の向上、校務分掌力の向上を図る。

④教科部会や相互参観の実施を通じて授業力向上を図る。

6. 検証の方法

ア 研究推進委員会、教科部会、学年会で検討、協議を行う。

イ アンケートの活用

原則年間2回、生徒によるアンケート、教師によるアンケートをそれぞれ実施・分析し、課題に対しては改善策を検討する。

7. 研究の組織

定例の研究推進委員会で協議、企画の立案、提案を行う。「学力向上推進」と「授業力向上推進」の役割を意識し、効果的に運用する。

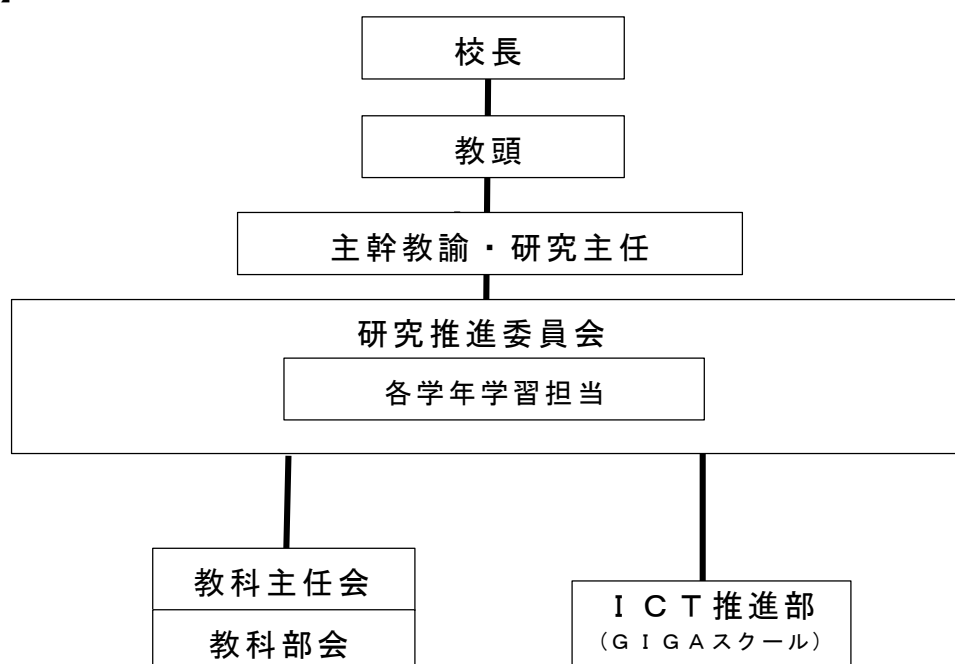
ア 「学力向上推進」

- ・学力調査等の分析および対応策を生徒の実態を考慮し、提案する。
- ・家庭学習の充実等を生徒の実態に即して提案する。
- ・定期テスト、実力テスト等の結果から、学習内容の習得状況を確認し、教科と学年から改善策を提案する。(補充学習等)
- ・学力調査等に向けての対策を計画し、学力の現状を把握するとともに対応策の提案をする。
- ・学力向上の取組について各学年と情報交換し検討する。

イ 「授業力向上推進」

- ・生徒による授業アンケートの実施について提案し、結果を集計し、分析および改善策について教科で共通理解し実践する。
- ・授業改善セルフチェックシートの集計および改善策について全教員に提案し、共通理解し実践する。
- ・生徒による学習についての自己評価アンケートを実施し、その結果を集計、分析し、授業改善の取組を学年に提案し、学年で共通理解し実践する。

【組織図】



8. 年間計画

月	学校全体研究会	学 年 研 究 会	教 科 研 究 会	研究推進委員会	
4月	○学校研究の方向性と取組の共通理解 ○研究全体会	○学年経営方針の決定 ○学年経営案の作成	○教科研究テーマの決定 ○年間指導計画の確認	【学力向上】 ○学力向上の取組の検討 (教科部会、学年部会) ○1学期学力向上の取組の提案	【授業力向上】 ○アンケート項目の確認 ○校内サポート塾
5月	○校内研修会 (外部講師招聘)	○学年集会で学習の確認 (4～5月)	○公開研究発表会に向けて教科部会で取り組みを検討 ○公開研究発表会に向けて学習指導案の作成・実践 (～10月中旬)	○1学期中間テスト前の取組の確認、実施	○校内サポート塾
6月	○小中一貫教育の日		○評価及び評定方法の共通理解	○1学期末テスト前の取組の確認、実施	○校内サポート塾
7月	○校内研修会 (外部講師招聘)	○生徒の学習アンケートの実施 ○生徒の学習アンケートの結果を踏まえた改善策検討	○授業アンケートの実施 ○授業アンケートの分析と考察 ○公開研究発表会に向けた授業デザインの検討 ○公開研究発表会中心授業の模擬授業	○生徒の学力の実態の把握と対応策の検討 ○夏期休業中の学力向上対策 ○1学期学力向上の取り組みの検証	○教師の授業改善セルフチェックシートおよび生徒の学習アンケート、授業アンケートの実施と集計 ○校内サポート塾
8月		○1学期の検証と2学期の取組の確認	○1学期の検証と2学期の取組の確認	○学力調査等の分析および対応策 ○2学期学力向上の取組の提案	○1学期の振り返りと課題への対応策の検討
9月				○2学期中間テスト前の取組の確認、実施	○校内サポート塾
10月			○公開研究発表会に向けて学習指導案の検討・提出	○野田中校区内で学力分析の情報交換	○校内サポート塾
11月	○公開研究発表会 (外部講師招聘)		○公開研究発表会での公開授業の実施 ○研究協議会の実施および成果と課題の検討	○2学期末テスト前の取組の確認、実施	○校内サポート塾
12月	○研究紀要について確認・提案	○生徒の学習アンケートの実施および結果を踏まえた授業の取組の改善策検討 ○2学期の検証と3学期の取組の確認	○授業アンケートの実施 ○授業アンケートの分析と考察 ○次年度教育課程の検討 ○2学期の検証と3学期の取組の確認	○2学期学力向上の取り組みの検証 ○評価問題分析と対応策検討	○教師の授業改善セルフチェックシートおよび生徒の学習アンケート、授業アンケートの実施と集計 ○校内サポート塾
1月	○校内研修会 (外部講師招聘) ○研究紀要の編集			○3学期学力向上の取組の提案 ○評価問題分析と対応策提案	○校内サポート塾
2月	○来年度の研究の方向性	○本年度の反省	○本年度の反省	○3学期学力向上の取組の検証 ○学年末テスト前の取組の確認	○今年度の成果と課題の確認 ○校内サポート塾
3月	○研究紀要の完成(上旬)	○本年度の成果のまとめと次年度の課題の確認	○次年度の教育課程編成	○次年度へ向けての対応(学力向上の取組の検討)	○次年度へ向けての対応策(授業力向上の取組の検討)

〔通年〕 共通実践の授業参観 / 若手教員早期育成プログラムの実施

9. 研究経過

問いを創る授業を重点事項として、年間計画にもとづいて各種の取組を実施してきた。以下、(1)～(4)で、全教員で参加した授業研究協議会や公開研究発表会等について述べ、(5)で若手教員育成校内研修「ひまわり塾」について述べる。

研究活動報告書

(1) 研究全体会：令和6年4月4日（木）

「問いを創る授業」についての共通理解を図り、模擬授業を通じて実践的な学びを深めた。年度当初に、今年度の学校研究の重点と、「問いを創る授業」についての共通理解を図った。その後、問いを創る授業の手順やルールの意味について考える初回問いを創る授業の模擬授業を行った。この授業と同じ流れで全校同じタイミングで生徒対象の授業を実施した。模擬授業では「私たちの中学校では授業2分前着席することで成績が伸びた」を不思議のタネとし、疑問を創り、絞り、使う活動を一通り行った。またその中でルールの意義を考える活動や閉じた質問、開いた質問について違いを学ぶ活動を行った。

【問いを創る授業のルール】

- ・できるだけたくさん問いを創る
- ・問いについて話し合ったり、評価したり、答えたりしない
- ・人の発表は最後まで真剣に聴く
- ・意見や主張は疑問文に書き直す

(2) ひらめき体験教室・第1回校内研修会：令和6年5月9日（木）

立正大学鹿嶋真弓先生の指導のもと、知的交流体験を通じて考え続ける楽しさや話し合いの価値を学んだ。学年ごとにひらめき体験教室を鹿嶋先生に実施していただき、その後ひらめき体験教室の教育的効果と問いを創る授業についての考えについての校内研修会を実施した。ひらめき体験教室とは年齢や学力にとらわれない知的交流体験を狙いとし、たくさん話す、試す、間違いを恐れない、答えを出し続け、繰り返し試すことを促している。このことで考え続けることの楽しさを体感したり、話し合うことのメリットを感じとったりできる。この活動後に教員でひらめき体験教室の問題を創る活動を夏休みに実施したり、3年生の遠足で取り入れたりすることを実施した。また学活でプチひらめき体験教室を各学年で工夫して実施。生徒からはおおむね肯定的なフィードバックが多かった。謎を考える人や謎を探す人などそれぞれの活動で活躍する姿が見られ、謎が解けたときの表情がとてもよい生徒が多かった。

(3) 第2回校内研修会：令和6年7月30日（火）

三教科での模擬授業を通じて、問いを創る授業の実践と研究協議を深めた。公開研究発表会中心授業の模擬授業（1年国語・2年理科・3年数学）、授業研究協議会、鹿嶋先生による指導・助言。不思議のタネの提示から問いを創るまで模擬授業を国語・理科・数学の三教科それぞれで行い、その後パネルディスカッション形式で研究協議会を行い、鹿嶋先生から指導助言をいただいた。具体や抽象を意識しての問い創り、扱われ

なかった問いをどうするか、問いを創っている価値などを講演して頂き、日頃の問い創りや公開研究発表会に向けての授業作りの参考となった。

（４）公開研究発表会：令和６年１１月１日（金）

各教科での実践研究と鹿嶋先生による講演「生徒の問いから始まる主体的・対話的で深い学び～知的好奇心と探究心の育成～」を通じて、問いを創る授業の成果を共有した。公開研究の授業ではそれぞれが不思議のタネから問いを創って展開する授業を行った。１年の国語では大阿蘇の詩を扱い、班の人の意見を聞いて考えが広がったり、１００年というワードについて深く考えることができたりとしたことが生徒感想からわかった。２年の理科では事象や実験、既習事項を行ったり来たりしながらねらいに迫ることができた。３年の数学はデータを抽出させてみたり、無作為をやってみたりしながら標本調査とはどういう特徴があるのかを考えることができた。生徒が冒頭参加する研究協議会では生徒の素直な感想や考えたことを聴くことができ、好評であった。鹿嶋先生の講演では自分で課題を見つけたり創ったりすることが今後必要となっていてという話や問いを創る授業で磨かれる能力について取り扱われていた。今までの教育は人間のAI化を目指したものであり、今後は人間しか伸ばすことができない教育をしていくということがポイントであった。

（５）第４回校内研修会：令和７年１月２４日（金）

不思議のタネを用いたグループワークと鹿嶋先生による理論的講演を通じて、問いを創る授業の理解を深めた。教科ごとに用意された不思議のタネ（国語「新聞広告コンクール」、社会「日本は３０年以上不景気である」、数学「残り物には福がある」、英語「These are some of the World Heritage sites.」）を用いて、教員自身が生徒の立場で問いを創るグループワークを実施した。活動は、個人で問いを創り、付せんに書き出す、グループで問いを共有し上位３つに絞る、不思議のタネについて教員目線での感想を共有するという流れで行われた。その後、鹿嶋先生による「問いを創る授業の考え方や理論について」の講演を聴き、質疑応答を行った。研修後のアンケートでは、「図やイラストがあると思いつきやすい」「どんな問いづくりが求められているのか考えさせられた」「メタラーニングやねらいの語尾を変える手法を学んだ」「生徒の考えを広げて本題にどう持っていくか学んだ」「生徒が考えた問いが授業のねらいから離れていても問題はないことを理解できた」などの学びが報告された。また、「不思議のタネを引き続き活用していきたい」「経験だけでなく授業で学んだことを問いに結びつけることを目指したい」といった今後への意欲も見られた。

（５）ひまわり塾

若手教員早期育成プログラムの一つとして、若手教師を対象に、校内の人材（ICT サポーターや SC も含む）を講師に迎え、１カ月に１回程度、業後約 20 分間実施した。昨年度末に若手教員に行ったアンケートをもとに、「生徒指導」「道德教育」など各回異なるテーマで計画・実施した。

10 取組の検証

年間 2 回、生徒・教師によるアンケートを実施した。また、結果は各種調査の結果とともに学年会・教科部会・研究推進委員会で検証した。

アンケート項目の重点的な取組に関する設問とその結果は以下のとおりである。

〔生徒による学習アンケート〕 肯定的回答の割合

①「わからないことを進んで訊くことができましたか」 A 評価のみ

	R5 前期	R5 後期	R6 前期	R6 後期
1 年	34 %	34 %	36 %	40 %
2 年	25 %	29 %	31 %	37 %
3 年	45 %	53 %	36 %	44 %

②QU アンケート「自分のクラスは仲のよいクラスだと思う」 4 + 5 評価（5 評価）

	R6 前期	R6 後期
1 年	88 %（63 %）	83 %（58 %）
2 年	83 %（55 %）	75 %（47 %）
3 年	85 %（47 %）	85 %（61 %）

③QU アンケート「クラスの中にいると、ほっとしたり、明るい気分になったりする」

	R6 前期	R6 後期
1 年	80 %（55 %）	74 %（48 %）
2 年	66 %（36 %）	66 %（34 %）
3 年	75 %（33 %）	77 %（44 %）

〔教師によるアンケート〕 肯定的な回答の割合

・問いを創る授業に関する内容

学期に 1 回以上問いを創る授業を行ったか 前期：96 %

単元に 1 回は問いを創る授業を行ったか 後期：84 %

* 後期は問いを創る授業の頻度を上げるために学期に 1 回以上から単元に 1 回に項目を変更。

・探究活動に関する内容

生徒が創った問いをもとにレポートを作成したか

前期：60%

生徒が創った問いをもとにレポート等を作成したか

後期：52%

＊前期の実施の際に、レポート以外の形で探究活動を行ったものがあつたため
後期はレポート等に項目を変更。

・「構成的グループエンカウンターを月1回行ったか」

令和6年度 前期：4月82%、5月47%、6月35%、7月35%

後期：9月56%、10月77%、11月50%、12月22%

本研究主題での研究は初年度となり、昨年度から取り上げたアンケート項目にも変化がある。生徒アンケートでは「わからないことを進んで訊くことができましたか」は前後期で若干A評価が上昇し、昨年度と比較しても上昇している。特に今年度3年生は昨年度の数値より大きく上昇している。問題を与えられるだけでなく、不思議のタネをきっかけに自分で課題を見つけ、主体的に取り組むことを学んできていることが要因だと考えられる。

QUアンケートの分析では「自分のクラスは仲のよいクラスだと思う」「クラスの中にいると、ほっとしたり、明るい気分になったりする」は概ね良好である。しかし、最上位評価や推移を比較すると一緒に過ごす中で問題が起こって数値が下がったり、中学最後のクラス、行事の後ということで数値が上がったりしていることが考えられる。行事やクラスでの活動を通してレベルの高い話し合いに発展していったほしい。

今年度から取り組んでいる「問いを創る授業」では今までの授業と違い、不思議のタネで問いを創る、取り組むという生徒が課題に対して自分の問いを持つというスタイルで進めている。この部分において「生徒が狙った問いを出してくれるか」「こちらから出した方がスムーズに進められて効率的ではないか」という考えから躊躇し、なかなか取り組めないよう思われる。

構成的グループエンカウンターにおいては学活などの時間の確保が難しいということに加え、構成的グループエンカウンターとは何か、何を狙っている活動か、という共通理解がなされていないことが実施の数値の下降につながっていると考えられる。

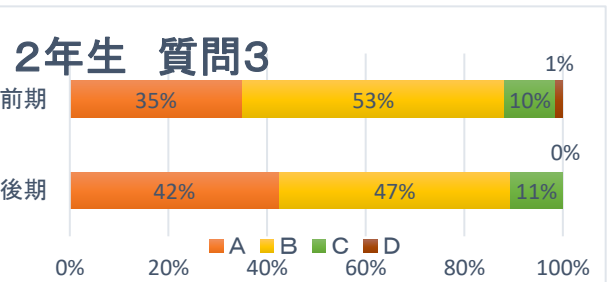
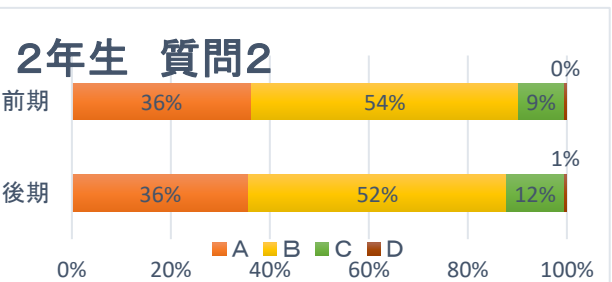
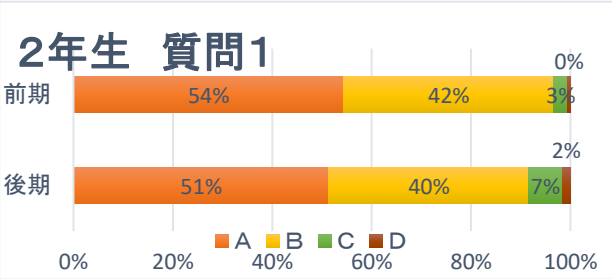
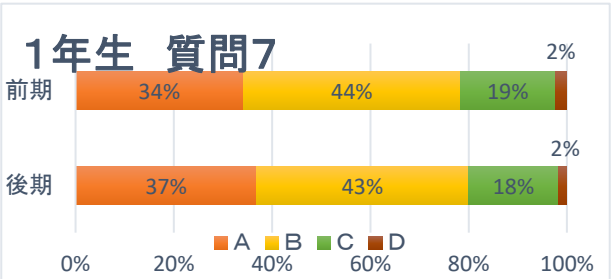
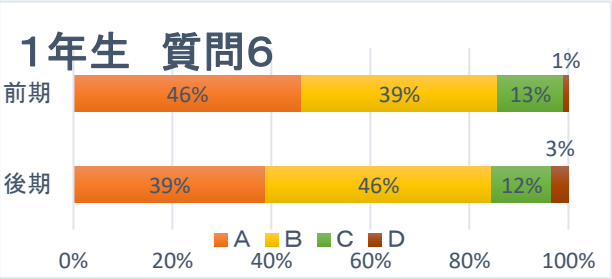
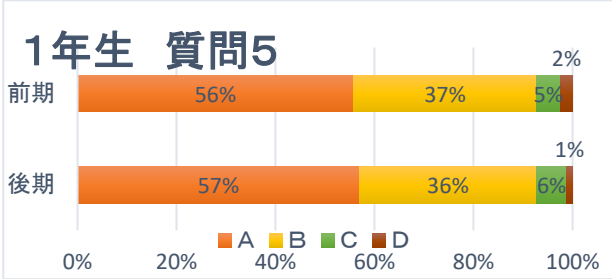
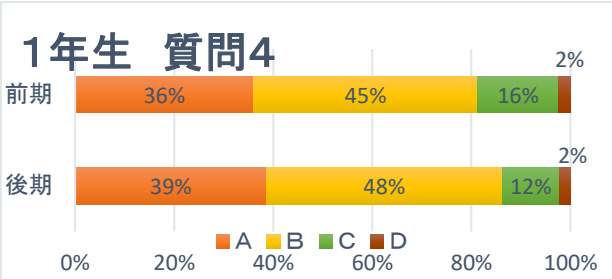
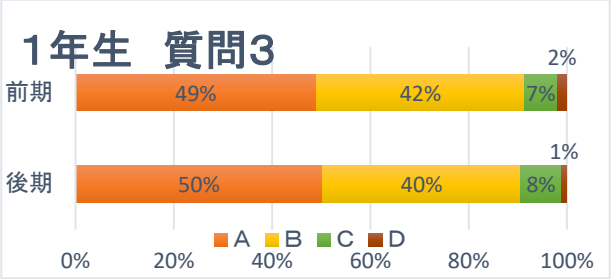
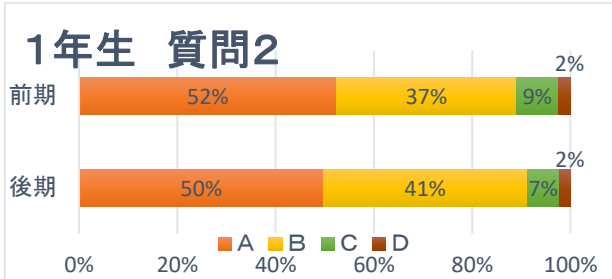
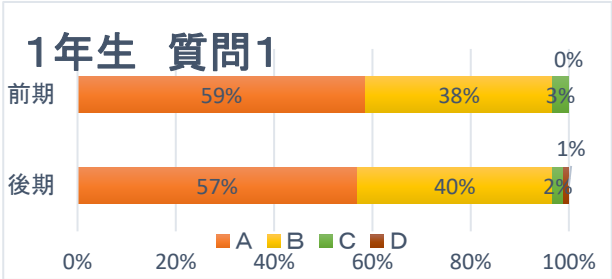
これからは教員主導の授業から生徒主体の授業にシフトチェンジしていけるように研究部や教科部会を中心に研究、実践を積み重ねていきたい。

次頁より、公開研究発表会での国語・数学・理科の指導案を掲載する。

IV アンケートの結果

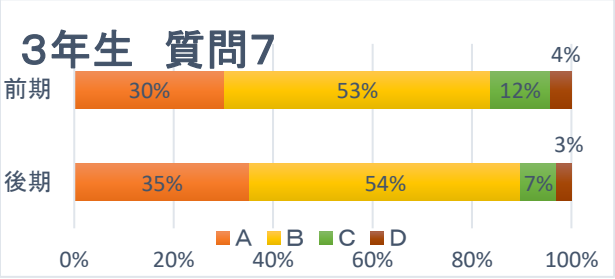
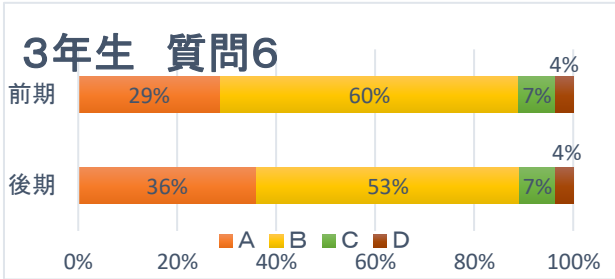
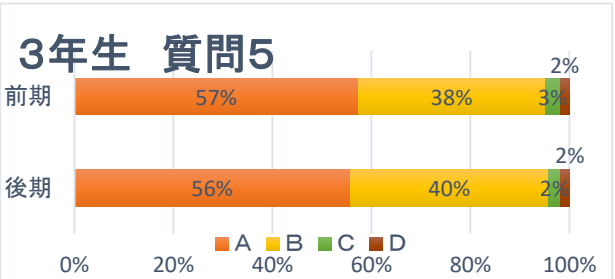
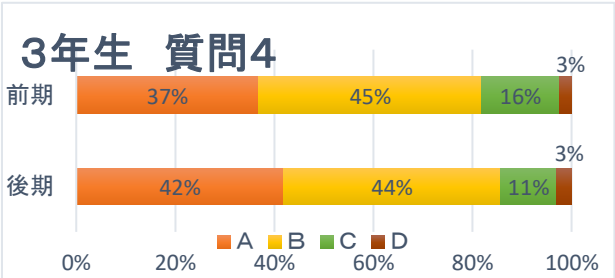
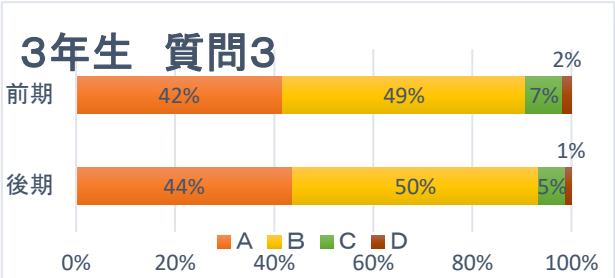
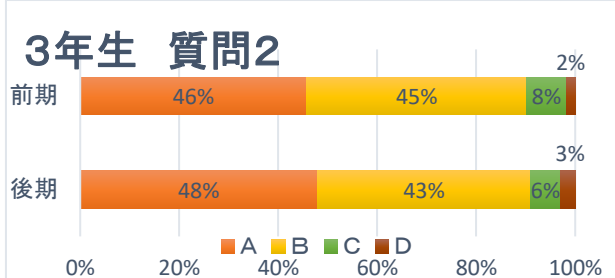
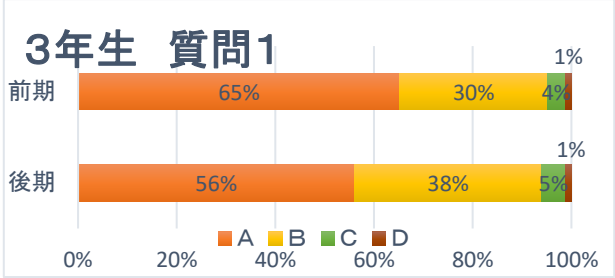
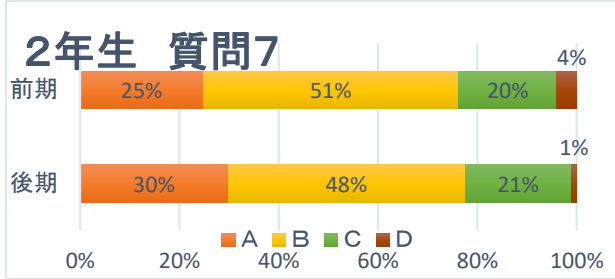
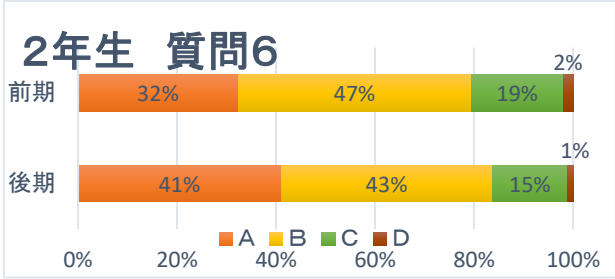
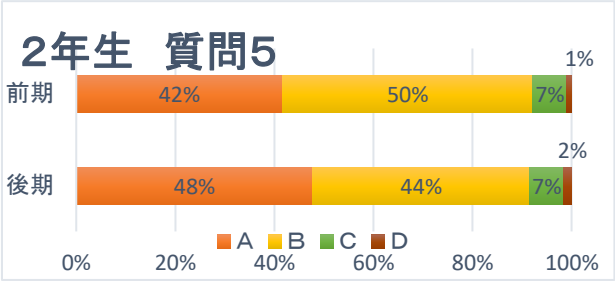
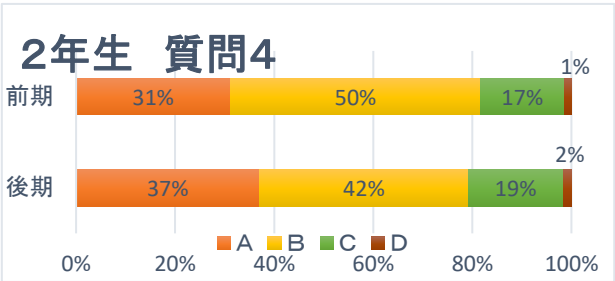
1. 学習アンケート

問1. 授業の前に必要な道具を準備して、けじめをつけて始めることができましたか。
問2. あきらめずに最後まで集中して取り組むことができましたか。
問3. 課題について、自分の考えを持つことができましたか。
問4. 分からないことを進んで訊くことができましたか。
問5. 分からないことを訊き合うことで、学びが深まりましたか。
問6. 授業の終わりに課題に対してまとめをすることができましたか。
問7. 授業のまとめりと振り返りをして、自分の考えの変化や成長、新たな疑問、調べてみたい
こと等を書くことができましたか。



IV アンケートの結果

1. 学習アンケート



アンケートでは、達成の基準を肯定的評価80%とした。全学年でどの項目も指標を達成し、学びに対する前向きな姿勢が維持されていることが分かる。特にA評価は、1年生の質問1・2を除き、すべての項目で増加し、学習の質が向上していることがうかがえる。これは、全校で研究の重点が共有され、実践されている成果と考えられる。一方、1年生の質問1・2では4～8ポイントの減少が見られたため、授業への集中や意欲を高める工夫が今後の課題となる。